

ボランティア主体と傾聴を中心にした授業の成果と課題

筒井洋一*

Email: ytsutsui@gmail.com

*: 大谷大学

◎Key Words ボランティア、傾聴、対話

1. はじめに

これまでの大学教育と言え、教室にいる教師と学生との間でおこなわれてきたが、近年、産学や地域との連携授業では、企業や地域の人々が授業に関わってくることが多い。

学生が現場に行き、企業や地域の人々の話を聞いたり、実態調査したり多様な関わり方がある。しかし、多くの場合、企業や地域の方々の語りが大きな位置を占め、学生は調査者として受け身的な対応をする場合が多い。

しかし、学生が主体となって、学生グループでの取り組みに対して、それ以外の人がどのような関わりをするのだろうか？

本授業では、授業を担っている授業ボランティアや見学者のいずれもが学生に対して傾聴を主とした関わりをしてきた。これによって、学生の自律的学習者への成長にどのようなつながっているのかについて、検証する。

2. 授業ボランティア中心授業における対話の特徴

2013年から始まった大学の授業は、学外からの授業ボランティアが中心になって、学生や見学者と一緒に創っていく授業である。事前に教員が学生向けのシラバスは作成しているが、全体のゴールと15週間での大枠のテーマ時だけであって、毎回の授業設計・進行についてはボランティアに全面的に委ねられている。したがって、毎回の蓄積よりも、集まったボランティア同士の話し合いの中で毎回異なった授業がおこなわれてきた。

授業準備および授業中には、教員とボランティアが一緒になって授業設計するので、授業中の大半はボランティアが進行する。したがって、授業には教員の権限がなく、ボランティアが全面的に責任を持って進行する。

授業進行の責任を持つボランティアは、大学生に対してどのような接し方をするのかですが、授業の最初にボランティアが本日の課題について提示する以外は、学生同士のグループワークが主体となる。ボランティアは学生に対して何らかの知識提供する以外は、学生同士の話し合いの中から生まれてきたことを肯定的に受け止めている。このように従来の授業では、教員から大学生への一方向の知識提供が主体になっているのに対して、この授業では、考えるきっかけとしての話題提供をボランティアがおこなうことがあっても、判断すること自身は学生がおこなうのである。

3. 対話を中心にした授業における大学生の対話とは

授業では、ボランティアが教壇に立って、問題提起をおこなうことが終わると、後は、学生だけでグループを組んで話し合う。

この授業では、学外の見学者も自由に見学可能であり、学生グループの話し合いを側で見ることができる。見学者の多くは、通常だと学生と離れた場所において観察するか、逆に、学生グループの話し合いの中に入り込んで意見を言うことが多い。

この授業では、いずれもせず、見学者は学生の話に関わらず、ひたすら聞き続ける傾聴を主とした対応を求められる。

教員と学生だけの従来の授業であれば、学生グループだけでの話し合いは学生だけであり、外部の人とは隔絶された環境でおこなう。その一方で、学生グループの話し合いの場に、外部の見学者がいることは、当初、違和感を感じる学生もいる。その一方で、学生は常に外部の存在を意識しながら、話し合いを始めることになる。

もちろん、そこでは自己紹介をのぞき、学生同士の話し合いの中では見学者はひたすら傾聴することになるので、学生からは見学者のコメントを意識する必要はない。学生の話し合いにとって、常に見学者という外部の存在があることがどのような影響を与えるのかについては、発表時に詳細について述べるが、当初見学者の存在に違和感を抱いていた学生であっても、徐々にその違和感がなくなり、終盤になるとまったく違和感がなくなっていくのである。15回の授業において、見学者の存在は学生に置いては大きな変化をするのである。

では、対話を中心にした授業の中で、大学生はどのような対話をおこない、それがどのような影響を与えたのか？

これについては、以下の質問について受講生に尋ねた。

- | | |
|-----|--------------------|
| 問1. | 受講動機 |
| 問2. | 授業の特徴 |
| 問3. | 授業ボランティアや見学者に対する見方 |
| 問4. | 自律的学習者への変容 |

詳細については当日報告するが、多くの学生は、この授業ではグループワークや他の学生との協働がおこなわれることを事前に知っており、それらに対する興味関心が強い。

当初、授業ボランティアや見学者と一緒に学ぶとい

うスタイルへの戸惑いがありつつも、徐々に学生グループの意欲が高まってきたのである。

4. 自律的学習者としての成長と対話

授業に外部の第三者が関与しつつも、第三者は傾聴で学生に接することは何を目的にしているのだろうか？

従来、授業は、教師の力量を示して、教師によって学生にどこまで影響をあたると考えがちである。これによって、教師の存在意義を明らかにすることで、教師集団の中での該当教師の影響力を強めようとしてきた。

しかし、そもそも授業は教師の顕示欲の発現の場ではない。むしろ、学生自身がどのように成長するのが問われなければならない。仮に教師によって学生が変化したとすれば、教師なしには学生の成長がない。つまり、教師のいない場では学生は成長しないことになる。

そこで、授業の場で、学生自身が自ら判断して自律的学習者になるためには、教師がいなくても学生が成長することが目標となる。当授業では、授業の中心は外部のボランティアが進行し、学生グループにも教師は関与せず。見学者も学生に対して傾聴を主とすることによって、学生自身は自らの思考、判断力が求められる。

自律的学習者の育成を授業の目標にする限り、教師は教師の知識や思考方法の伝達者、つまり、「教える人」ではなく、学生が自身の過去や現状を振り返り、そこから得られることが求められる。

教員がいなくても、学生が自律的学習者になるためには、学生が街角で出会った人々と交わる中で新しい学びが生まれる事に似ている。つまり、学生が何か疑問が出てきたり、その学ぶ姿を第三者に見せたりすることで、相談したり、意見を求めたりする。

課題に関する質問に対して学生が教員に尋ねるのではなく、自分たちで考えたり、ボランティアや見学者と相談することが当たり前になり、最終発表ではいずれの学生チームも相互に高め合ってクオリティーの高い発表をおこなった。受講生に対して、課題に対して自律的に取り組む点に関して多くの学生が向上し、ボランティア・見学者との中で、学びの共同体を作っていることがわかる。

当該授業の対面授業では、実際に授業ボランティアや見学者が授業にやって来て、学生の学びを見守っている。見学者は最初はひたすら学生のやりとりを傾聴するが、徐々に学生の相談に乗って対話が生まれていく。ここ二年間はオンライン授業となっているが、ボランティアや見学者のスタンスは変わらない。学生に対しては傾聴を中心にして、学生自身で思考し、判断することを旨としているが、最終段階では相談も可能にしている。過去二年間のオンライン授業では、大学に来られない、遠距離からのボランティアや見学者が多数参加し、しかも見学者であってもほぼ毎回参加する見学者が多いことで、授業当初から最後まで学生の姿を見ることができた。

2021年度後期のオンライン授業では、海外からの参加者も多かった。授業ボランティアの一名がフランスの日本語教師であり、欧州全域におけるオンライン日本語学校代表であることから、見学者も欧州やアジアからの参加も多かった。

5. おわりに

授業の進行を授業ボランティア中心にすることで、教師と学生との上下関係を意識することが極端に減少する。授業を進行する授業ボランティアも学生の学びの同伴者として接し、見学者も傾聴を基本にする限り、学生は誰かに依存することよりも、学生同士の対話の中から課題に向き合おうとする。このことから、教師は「教える人」としての力量を高めることよりも、授業ボランティアを中心にしたオープンでフラットな「学びの場を創る」ことが求められる。

教師が授業内で大きな影響力を行使するのではなく、むしろそこから退却し、学生、ボランティア、見学者の学びの場を創ることに専念することで、自律的学習者としての学生の変容を得ることができるのである。

見学者が当初傾聴に徹する意味は大きい。つまり、教師がいない、学生だけの場に参加する見学者が積極的にコメントすることで、見学者の望む学生場になりやすい。しかし、学生だけの話し合いは、社会人と比べると順調に進展するわけではない。しかし、学生特有の動きの中で学生グループの発表に向けては大きな成長が見られる。学生独自の動きを見学者がひたすら見守ることで、学生自身が判断しながら変容することができるのである。

参考文献

- (1) 筒井洋一他編著『CT(授業協力者)と共に創る劇場型授業—新たな協働空間は学生をどう変えるのか』(東信堂、2015年)